

年中児を対象とした名前書字の評価方法の検討

— パイロットスタディ —

中村哲也¹⁾ 小林マヤ²⁾

1) 東北文化学園大学 医療福祉学部 リハビリテーション学科

2) 昭和女子大学 人間社会学部 福祉社会学科

要旨

本研究の目的は、年中児を対象に名前を書けるようになるまでの発達について検討するとともに、名前書字を評価するための評価マトリックスを作成することである。保育園に在籍する40名の年中児を対象に名前書字をさせるとともに、語彙理解検査、語彙表出検査、音読検査、音韻意識の言語検査を実施した。名前書字の反応をLieberman(1985)の評価マトリックスに準じて分類した結果、正確な文字ではない記号、文字を書くことを拒否する、自分の名前にある文字が数文字書ける、自分の名前の文字数が理解できる(文字形態は不正確)、名前が正確に書ける、の順に発達していくことが明らかとなった。また、名前書字の発達段階と言語検査の間で有意な相関を示したのは音読のみであった($\rho=0.46, p<0.05$)。これは、対象年齢が限られていたためと考えられ、今後は年齢層を拡大して調査していく必要があると思われる。

【キーワード】 名前書字, 健常発達, 年中児

I. はじめに

日本における幼児期の書字研究では、仮名文字1文字の書き取りの発達年齢を調査したもの⁴⁾¹¹⁾¹³⁾、なぞり書きや模写を通じた書字技能の発達を検討したもの⁵⁾¹⁰⁾¹²⁾¹⁴⁾、視覚認知と書字能力の関連を検討したものなどがあるが⁸⁾、名前が書けるようになるまでの発達を検討したものはない。子どもが書くことを学ぶ最初のステップは自分の名前を書くことであり、幼児期に名前がどの程度書けるのかを明らかにすることは、書字の発達を理解する上で重要であると思われる。

一方、英語圏では就学前の幼児に対して名前が書けるようになるまでの発達過程が横断的・縦断的に調査されており、名前書字の発達段階

を分類・評価しようとする試みが行われている²⁾³⁾⁶⁾。各研究者で分類基準は若干異なるものの、幼児期の名前書字の発達は、走り書き、分離した図形、模写、ランダムな順序の綴り、ほぼ正しく書ける、完全に書けるようになるといった順序を辿るとしている¹⁾。また、名前書字の発達が音韻意識や聴覚的言語理解などの言語機能と関連があることや¹⁵⁾、幼児期において名前が書けるかどうか、後の文字学習や読解能力を予測するとの報告もみられる⁹⁾。このように、英語圏では、名前書字の発達には一定の段階があり、さらには言語機能との関連性も指摘されている。そのため、日本語においても名前書字の発達段階を明らかにし、言語機能との関連を検討することにより、名前を書かせるという簡

単な検査によって、言語発達を大まかに推測することができる可能性がある。そこで、本研究では年中児を対象に名前書字の反応を Liberman⁶⁾の評価マトリックスに準じて分類することにより、日本語の名前書字の発達段階を明らかにすることを目的とした。また、その発達段階と言語検査との関連性についても検討を行った。

II. 方法

1. 被験児

先行研究¹³⁾より、4歳頃からひらがなを模写が可能となり、文字を想起して書けるようになるのが5歳～6歳であることから、名前書字の変化を捉えることが可能と思われる年中児を対象とした。被験児は静岡県の私立保育園2園に在籍する年中児40名(4歳10カ月～5歳10カ月、平均月齢63.8±3.2カ月、男児21名・女児19名)を対象に調査を行った。そのうち、健常発達を対象とする観点から絵画語彙発達検査にて評価点5(1標準偏差以下)であった1名と検査途中で疲れた様子がみられたため全ての課題を実施できなかった1名の計2名(いずれも男児)を分析対象から除外した。

2. 手続き

1) 名前書字検査

A4の白紙の紙を横向きで渡して「あなたの名前を書いてください」と指示して名前を書かせた。

2) 語彙理解検査：絵画語彙発達検査(PVT-R)

語彙理解検査として、絵画語彙発達検査を実施した。検査手続きに従って実施し、正答数と誤答数から修正得点を算出した。

3) 語彙表出検査：K-ABC-II 表現語彙

語彙表出課題として、K-ABC-IIの表現語彙の下位検査を実施した。検査手続きに従って実

施し、正答数を算出した。

4) 仮名音読検査

日本語におけるひらがなとカタカナの出現頻度の高い順から各18文字を呈示して一文字ずつ読ませた。音読できたものを1点として36点満点で採点した。また、カタカナの習得は幼児期から徐々に始まっているという報告があることから⁴⁾、今回は音読にひらがなだけでなくカタカナも採用した。

5) 音韻意識検査

語頭・語尾選択課題を実施した。実施手順は、語頭音選択課題では同じモーラ数で語頭音が1つだけ異なる単語の絵カード3枚(例：うみ・いぬ・いか)を呈示して復唱させ、語頭音が異なる単語を1つ選択させた(図1)。語尾選択課題も同様に、3枚の有意味単語の中から語尾が異なる単語を選択させた。刺激語は親密性が高い2モーラから4モーラの有意味単語を使用した。語頭、語尾選択課題それぞれ10試行実施し、20点満点で採点した。



図1. 語頭選択課題図版

3. 倫理的配慮

倫理委員会の承認を経た後、各施設の施設長の承諾を受けて検査を実施した(聖隷クリストファー大学・倫理番号21022)。また、保護者に研究内容の説明をした上で同意書に署名をしていただいた。検査中に本人が嫌がった場合には直ちに検査を中止とした。

III. 結果

1. 名前書字の発達段階

名前書字の反応を Liberman⁶⁾ の評価マトリックスに準じて 16 段階に分類した(表 1)。小児の臨床経験が 20 年以上である言語聴覚士 2 名で評価段階を判定した結果、評価者間の一致率は 96%であった。評価者間で不一致であったものは、協議の上で評価段階を決定した。各発達段階の反応は以下の通りである。

段階 0 [無反応/拒否]: 段階 0 を示したものは 3 名(8%)であった。いずれも「名前は書けない」と書字を拒否するものであった。

段階 1~5 [走り書き・ジグザグ線]: 描画と区別できなかったり、直線など図形が分離していない反応をするものは認められなかった。

段階 6 [独立した文字らしきものがみられる]: 文字とは認識できるレベルではないが、個々に独立した図形を書いたものは 2 名(5%)であった。



図 2. 段階 6 の書字反応例

段階 7 [正しい文字が 1 つ以上かける]: 自分の知っている正しい文字を単発的に書くことができるものは 3 名 (8%) であった。正しく書いた文字はいずれの被験児も自分の名前にあるひらがなであり、名前にはない文字を書いたものはいなかった。



図 3. 段階 7 の書字反応例

段階 8~10 [正しい文字や分離した文字らしき記号を含めて 4 文字以上書かれているが、自分の名前の文字数とは異なる]: 部分的に正しい文字が書けるようになったもので、文字と文字らしき記号を含めても書いた文字数が 4 つ以上となったものはいなかった。

表 1. Liberman の評価マトリックスに基づいた名前書字段階の分布

段階	内 容	人数	割合
0	無反応/拒否	3	8%
1	図形的な描画（走り書き）、書くことと描くことの区別がない、図形や文字らしきものが認識できない。	0	
2	図形的な描画（走り書き）：書くことと描くことの区別がない、絵の中にランダムに文字らしきものが散らばっている。	0	
3	図形と書字に空間的な違いが認められる。書字は直線的であるが、描画は曲線的で円形となる。	0	
4	名前は水平に連続したジグザグ線となる。	0	
5	名前は連続した水平のジグザグ線に加えて、個々に分離した文字らしき記号が出現する	0	
6	名前は直線的で独立した文字らしき記号となる。	2	5%
7	書かれる文字数が減少する。名前は1つの正しい文字（最初のいくつかの文字、または名前の最初と最後の文字）が書けるようになる。	3	8%
8	名前は正しい文字と分離した文字らしき記号が合わせて4つ以上含まれるようになる。	0	
9	子どもの名前にある文字で構成されているが、順番がバラバラで必要な文字が書かれていなかったり、余分な文字が追加されていたりする(文字数は異なる)。	0	
10	子どもの名前にある文字で構成されているが、必要な文字が書かれていなかったり、余分な文字が追加されていたりする(文字数は異なる)。	0	
11	書いた文字（正しい文字・誤った文字・文字らしき記号）は、実際の自分の名前の文字数と同じである。	2	5%
12	名前は書こうとしている文字と認識できるレベルで書かれているが、まだ文字の形が不正確なものがある。	3	8%
13	名前は正しい文字と文字数で書かれているが、文字の並び順が入れ替わっている。	0	
14	姓と名前のうち、名前は正しい文字、正しい文字数、正しい順序で書かれている。	8	21%
15	姓と名前は正しい文字と順番で書かれているものの、鏡映文字になっていたたり、左から右に逆に書かれていたりする。	4	11%
16	姓と名前ともに正しく書けている。	13	34%

段階 11 [誤った文字や文字らしき記号はあるが、自分の名前と同じ文字数である]: 名前の文字数を正しく認識しているもので、目標の文字とは認識できない図形を書いたり、誤った文字を書いたものはいなかった。ここに分類された 2 名(5%)は、「えいと」の“え”は書けない」と文字があることは理解しているが、自分が書けないことを認識しているため、書字を拒否したものであった。反応から文字数は理解していると思われたため段階 11 とした。

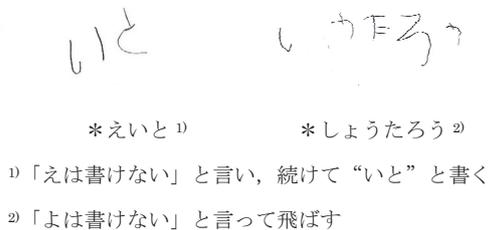


図 4. 段階 11 の書字反応例

段階 12 [名前はほぼ正しい文字と順番で書かれているが、文字が一部不正確なもの]: 名前の一部の文字が鏡映文字になっていたり、点が不足していたりと一部文字が不正確なものは 3 名(8%)であった。



図 5. 段階 12 の書字反応例

段階 13 [文字は全て正しいが、文字の並び順が異なる]: 文字の並び順が異なるものは認めなかった。

段階 14 [姓と名前のうち、名前は正確に書いている]: 姓と名前のうち、名前のみ正確に書けるものは 8 名(21%)であった。姓は「かけない」と言うものと、部分的に書けるものがあった。

段階 15 [姓と名前はほぼ正しい文字と順序で書かれているが、一部不正確なもの]: 段階 15 は 4 名(11%)であり、姓の文字に鏡映文字が見られたものが 3 名、姓と名前の文字は全て正しいが、左から右に逆方向から書いたものが 1 名であった。

段階 16 [姓と名前が正しく書かれている]: 姓も名前も正しく書けるものは 13 名(34%)であった。

2. 名前書字の段階と言語検査との関連

Lieberman⁶⁾ の評価マトリックスで分類した書字段階と月齢・各言語検査について、スピアマンの順位相関係数を算出した(表 2)。名前書字の段階と有意な相関を示したのは仮名の音読のみであった。

表 2. Lieberman⁶⁾ の名前書字の段階と月齢・言語検査との相関 (ρ)

語彙理解	語彙表出	音韻	音読
0.12	0.32	0.27	0.46**

n=38 , ** $p < 0.05$

Lieberman⁶⁾ の評価マトリックスで分類した書字段階と月齢・各言語検査の箱ひげ図を示す(図 6~図 10)。段階 0 [無反応/拒否] と段階 6 [独立した文字らしきものがみられる] は、月齢と全ての言語検査において中央値が逆転しており、段階 0 よりも段階 6 の方が低い値を示した。また、段階 6 は他の段階と比べると成績が低い傾向にあった。

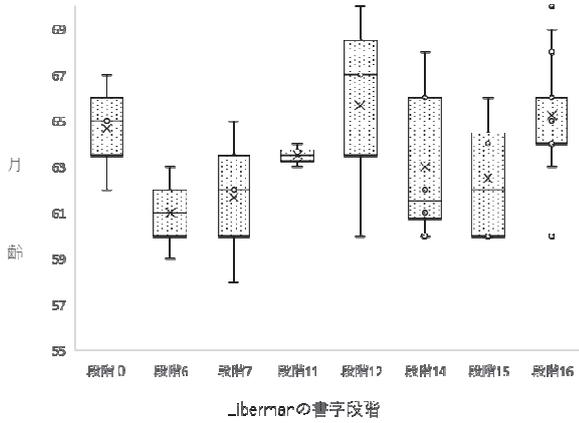


図 6. Liberman の書字段階と月齢

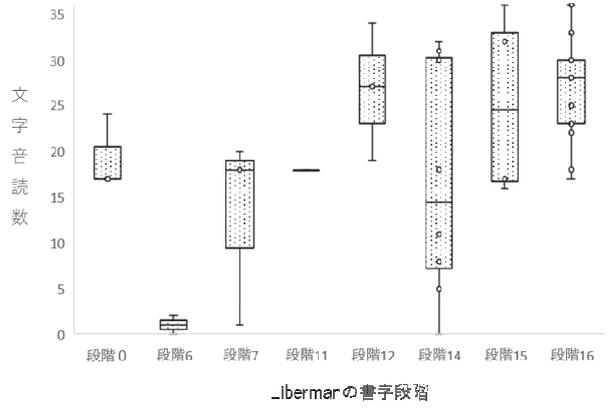


図 9. Liberman の書字段階と音読数

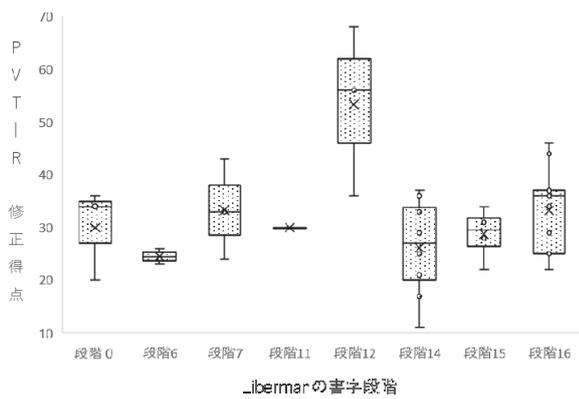


図 7. Liberman の書字段階と語彙理解

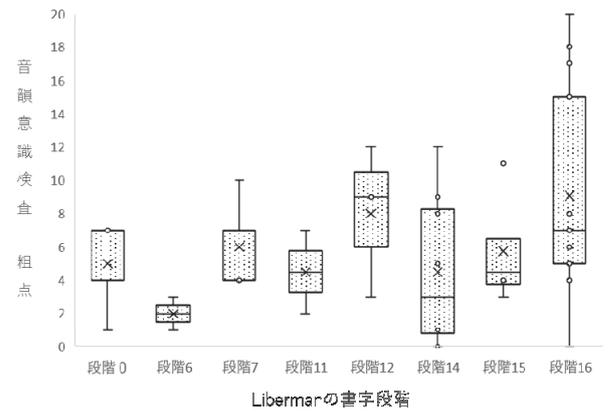


図 10. Liberman の書字段階と音韻意識

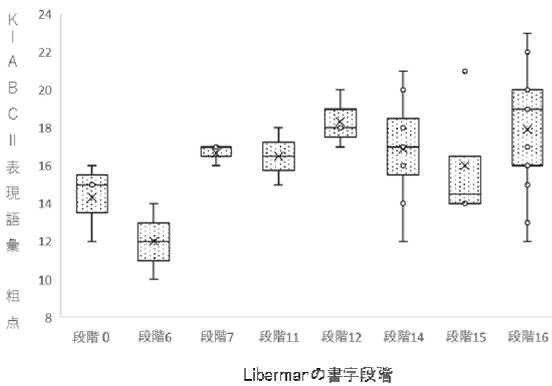


図 8. Liberman の書字段階と語彙表出

IV. 考察

1. 名前書字の発達段階

1) 正しい文字が 1 文字書けるようになるまで (段階 0～段階 6)

Liberman⁶⁾の評価マトリックスによると、名前書字において文字が書けるための発達段階は、最初は無反応/拒否があり、次に絵と文字の区別がついていない描画の状態から、文字を表象するものとして独立した図形が出現するとしている。本研究では、段階 0 の書くことを拒否したものが 3 名、段階 6 の文字とは認識できるレベルではないが個々に独立した図形を書いたものが 2 名であった。しかし、段階 0 と段階 6 は、全ての言語検査において中央値が逆転しており、

段階0よりも段階6の方が低い値を示していた。これは、段階6を経てから段階0に発達していく可能性があることを示唆している。名前書字の発達を調査した縦断的研究において、Martens⁷⁾はアルファベットが少し書けるようになった後で、書くことを拒否する時期が存在することがあると述べている。これは、自分の書いた文字らしき記号が正しい文字ではないことを理解しているからこそ、書くことを拒否しているのだと推測される。そのため、文字とは認識できないが独立した記号を書けるようになったもののうち、正しい文字形態の認知が進んでくると書くことを拒否するという発達の順序を辿るのではないかと考えられる。

2) 姓と名前が正確に書けるようになるまで(段階7～段階16)

Lieberman⁶⁾によると、文字が1文字書けるようになった後は、文字数が4つ以上に増加し、名前の文字数が一致したのち、文字形態が正確に書けるようになり、最後に文字の順序が正しくなるという発達を辿るとしている。本研究においても、自分の名前の文字数が把握できてから、文字形態が正確になっていくという経過は一致していた。日本語の名前書字の発達においても、前半は音韻意識の発達が名前の書字反応に現れ、後半は文字形態の正確な再生に関する能力が名前の書字反応に表れてくるものと考えられる。

一方、Lieberman⁶⁾の英語の発達段階と異なるのは、1つ正しい文字が書けるようになると、その後に文字数が増加していくという現象が認められなかった点である。この現象は、一般的にアメリカ人では名前を構成するアルファベットの文字数が多いため (Michael, Andrew, Katharine など)、名前を構成するためには多くのアルファベットを要するという認識が発達するためと考えられているが²⁾、日本の名前は

アメリカ人に比べると名前を構成する文字数が多くないため (はると、ふみや、しんたろうなど)、文字数が増加するという現象が認められなかったものと思われる。また、日本語においては文字の順序が入れ替わるという現象も認められなかった。これは、英語と日本語の名前の文字数と音韻構造の違いによるものと思われる。日本語は名前の文字数が少ないため、文字の配列を記憶するのが容易であること、また日本語は音と文字が一致している音節構造であるため、高度な音韻意識の能力を必要としないことが影響しているものと推測された。

以上のように、日本語の特性を考慮するとLieberman⁶⁾の評価段階を表3に示す評価段階に統合できるものと考えられた。

本研究では5歳代を中心とした年中児を対象としたため、文字の存在を認識し、正しい文字を1文字書けるまでの反応を示す被験児が少なかった。文字が音を表象するものとして認識す

表3. 日本語の名前書字段階

日本語の段階	Liebermanの段階	内容	人数	%
1	1~4	個々に分離した図形がみられず、殴り書きや直線に限られる。	0	0
2	5~6	個々に分離した図形がみられるが、文字の形態をなしてはいない。	2	5%
3	0	拒否	3	8%
4	7~10	名前の最初の文字や最後の文字など単発的に1文字以上書けるが、文字数は合っていない。	3	8%
5	11~13	名前の文字数は合っているが、文字の形が不正確であったり鏡映文字がみられる、また順番が入れ替わっているなどにより不正確である。	5	13%
6	14	姓と名前のうち、少なくとも名前は正しい文字、正しい文字数、正しい順序で書かれている。	8	21%
7	15	姓と名前は正しい文字と順番で書かれているものの、姓の一部が鏡映文字になっていたり、左から右、上から下など逆方向に書かれていたりする。	4	11%
8	16	姓と名前ともに正しく書けている。	13	34%

る過程が名前書字の反応にどのように現れるかについて明らかにするためには、3歳～4歳の低年齢層でも調査する必要がある。

2. 名前書字と言語発達の関連

名前書字の段階と言語機能との間に有意な相関が認められたのは音読数のみであった。文字の音読は、文字形態から音韻情報を引き出す過程であり、書字は音韻情報から文字形態を想起し筆記する過程である。認知処理の過程では逆のルートではあるものの、同じ認知処理を使用することから、音読数が多く音韻情報と文字形態の結びつきが強ければ、名前書字の発達段階も進んでいるのではないかと考えられる。

一方、音読以外の言語理解、言語表出、音韻意識の成績とは相関は認めなかった。これは、今回は対象年齢が4歳10カ月～5歳10カ月と限定されていたためと考えられる。また、今回実施した音韻意識課題は、語頭音を抽出するだけではなく、3つの語頭音を聴覚的に記憶しておきながら頭の中で比較するという **Working Memory** を必要とする。そのため、音韻意識以外の能力も成績に影響するため相関を認めなかった可能性がある。英語圏の研究では、名前書字の発達が音韻意識や聴覚的言語理解などの言語機能と関連があると報告されている¹⁵⁾。そのため、今後は言語検査の課題内容を再検討したり、対象者数や年齢層を拡大することで、言語機能との関連を再度検討していくことが必要であると考えられた。

V. 結語

年中児40名を対象に名前が書けるようになる発達過程について検討した。名前書字の発達段階は、走り書き、正確な文字ではない記号、文字を書くことを拒否する、自分の名前にある文字がいくつか書ける、自分の名前の文字数が理解できる(文字形態は不正確)、名前が正確に書けるの順に発達していくことが明らかとなっ

た。今後は対象者数や年齢層を拡大して調査していく必要があると思われる。

開示すべき利益相反は存在しない。研究にご協力いただいた皆様に深くお礼申し上げます。

VI. 文献

- 1) Chian, A. Major Developmental characteristics of children's name writing and relationships with fine motor skills and emergent literacy skills. Michigan: Doctoral dissertation, University of Michigan; 2011.
- 2) Ferreiro, E. & Teberosky, N. Literacy before schooling; Portsmouth, Heinemann Educational Books; 1982.
- 3) Hildreth, G. Developmental sequences in name writing. *Child Development* 1936; 7 (4): 291-303.
- 4) 国立国語研究所. 幼児の読み書き能力. 東京: 東京書籍; 1972.
- 5) 石川侑香, 谷岡真衣, 荻田知則: ひらがな学習入門期の書字について—読み・聴写・試写の比較から—. *愛媛大学教育学部紀要* 2007; 54(1): 69-72.
- 6) Lieberman, E. Name writing and the preschool child. Arizona: University of Arizona; 1985.
- 7) Martens, P. I already know how to read. Portsmouth: Heinemann Educational Books; 1982.
- 8) 三塚好文: 健常児における書字能力と形態認知との関連—精神遅滞児の書字能力を高めるための基礎的検討—. *特殊教育学研究* 1994; 31(4): 37-43.
- 9) National Early Literacy Panel (NELP). Developing early literacy -A scientific synthesis of early literacy development and implications for intervention-.

Washington, DC: Department of Health and Human Services; 2008.

- 10) 小野瀬雅人, 福沢周亮: 書字技能 (handwriting skills)の発達に関する研究. 筑波大学心理学研究 1982; 9: 67-72.
- 11) 太田静佳, 宇野彰, 猪俣朋恵: 幼稚園年長児におけるひらがな読み書きの修得度. 音声言語医学 2018; 59: 9-15.
- 12) 崎原秀樹: 幼児における文字の視写の発達の变化—分節・構成の視点からの検討—. 教育心理学研究 1998; 46: 212-220.
- 13) 島村直己, 三神廣子: 幼児のひらがなの修得—国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して—. 教育心理学研究 1994; 42(1): 70-76.
- 14) Steinberg, D.D., 山田純: 書字能力発達に関する基礎的研究. 教育心理学研究 1980; 28: 310-318.

Sonia Q., Laura M., Tricia A. & Anita S.
Emergent name-writing abilities of preschool-age children with language impairment. Lang Speech Hear Serv Sch 2008; 40(1): 53-66.

Assessment methodology for name writing in preschool children — Pilot study —

Tetsuya Nakamura¹⁾, Maya Kobayashi²⁾

1) Faculty of Medical Science and Welfare, Tohoku Bunka Gakuen University

2) Faculty of Humanities and Social Sciences, Showa Women's University

Abstract

The purpose of this study was to examine the development of name writing in preschool children and to create an assessment matrix for evaluating name writing. The participants were 40 preschoolers. The measures used in this study were name writing, a vocabulary comprehension task, a vocabulary expression task, a letter identification task, and a phonological awareness task. The name writing samples were classified according to Liberman's name writing evaluation matrix (Liberman, 1985), and the results showed that the children developed in the following order: symbols that are not exact letters, refusal to write letters, ability to write a few letters in their names, understanding of the number of letters in their names (but not yet conventional letters), and ability to write their names correctly. Spearman's rank correlation was used to study the association between name writing and language tests. The only significant correlation was found for the letter identification task ($\rho=0.46$, $p<0.05$). This may be due to the limited age range of the subjects, and future surveys should be conducted with a wider age range.

【Key words】 name writing, typical development, preschool